

M. ヴェーバーの「プロテスタンティズム の倫理と資本主義の精神」(一)

笠 原 俊 彦

Abstract

Recently the attention of social scientists seems to have shifted mainly from the difference and the conflict between the East and the West to those between or among the capitalistic countries, and now we know several attempts to classify each of these countries of 'free economy' into a certain category defined beforehand as an element composing with others a list of the whole types of capitalism.

These efforts propose us indeed some convenient tools to grasp the present state of our economic world, but logically they are destined to fail because of the very method they employ; the method of 'classification' forces us to regard any concrete piece of reality at a definite time and place as a simple example of a certain category, by eliminating or ignoring its various characteristics and thus making us innocently throw it into the category.

With this method it is impossible for us naturally to understand the reality with its subtle and yet important attributes which may in time come to change the reality itself considerably so that it can be no more reasonably regarded as a sample of the category it once casted into.

For a long time I have been interested in the behavioral, especially 'spiritual', differences of the capitalistic firms, and secretly nourishing the idea that some of the eminent aspects of these differences could be most clearly appreciated by formulating the ideal types (i. e. Idealtypen

in Max Weber's sense) of the ethos of capitalistic firms. I noticed at the same time that Weber's 'capitalistic spirit' have the important implication for this attempt which might come to appear some day.

This is not the attempt in itself, but merely a preparation to compose myself the ideal types of the ethos of the capitalistic firms. It is a study to understand Weber's 'capitalistic spirit' manifested in his thesis 'Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus', "Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I", 1920; the history of the tremendous trials to understand or even defeat this is said to be that of misunderstanding.

This part of our observation on Weber's thesis begins with his notice of the fact that the functions of owners, management and higher-class workers in the large modern enterprises were occupied largely by Protestants as contrasted to Catholics.

Then it proceeds to Weber's proposal of several possible reasons for the fact, — as follows : (1) the economic reason that men of wealth and their families who once had accepted Protestantism had been advantageous because of their wealth to get the higher states in the modern firms; (2) the socio-psychological reason that freedom from the economic traditionalism had made rich people free also from religious tradition so that they could have accepted Protestantism; (3) the reason of the educational course preference that Protestants preferred the modern education established to prepare young men for business to classical one, whereas Catholics preferred the latter to the former; (4) the reason of occupational course preference that, in contrast to Catholics, Protestant workers who had trained themselves in the domestic industries tended to move to the factories of the modern firms to get here the higher grades of occupation; (5) the reason of economic rationalism that Protestants had strong attachment to economic activity even when they were majority or ruling groupe — a peculiar exception of general ex-

perience; (6) the reason of the love of 'this world' that Protestants loved the world and enjoyed the life.

With deliberation of Weber's examination of each of these reasons, it finally makes us see how and why Weber set his 'paradoxical' hypothesis that Protestants' love of 'the next world' and 'asceticism', not of 'this world' and 'hedonism', might have some intimate connection with their highly developed economic sense.

はじめに

いわゆる冷戦構造の崩壊以来、東・西間の相違と対立とに対する人々の意識が、資本主義諸国間の相違と対立とに向けられることとなったのは、周知のことだといえることができるであろう。

このような流れのなかで、いく人かの著名な学者や実務家は、資本主義諸国をいくつかの型に分け、その相違を明らかにしようとした。¹⁾ その際にとらえている基本的な考え方は、資本主義の特定の型と特定の資本主義国とを固定的に結び付けるもの、あるいは、別言すれば、資本主義の特定の型に特定の資本主義国を分類するもの、である。

だが、このような考え方は、いくつかの問題点を有している。例えば、特定の型に分類されたある国が、短時日の間にかなり変貌し、当初に分類された型に収めることが、もはや、不合理になってしまう、という事態の発生が、これである。このような事態は、例外的に生じるわけではけっしてない。それは、つねに生じうる事態なのである。さらにいえば、もともと、特定の資本主義国を特定の資本主義の型に分類しようとするとき、ひとは、この特定の国の多様な特質を切り捨て、ある特質のみに注目して、それを特定の型に放り込んでしまわざるをえない。以上のような困難は、分類によって現実を

1) このようなひととして、われわれは、例えば R. P. ドーア (R. P. Dore) 教授をあげることができるであろう。

認識しようとする考え方そのものに起因する困難なのである。

このように分類によって現実を認識しようとする考え方から明確に区別される考え方として、われわれは、すでに、マックス・ヴェーバー (Max Weber) の理想型 (Idealtypus) による認識を知っている。これは、現実を認識するために、これを測定する尺度としての理想型を形成し、この尺度によって現実を測定することによって、この限りでの現実の特質とその程度とを明らかにしようとする行き方である。²⁾われわれの当面の問題についていえば、われわれは、それを、資本主義といわれるものについていくつかの型を尺度として形成し、現実の資本主義国をこの尺度によって測定して、この限りで、その特質を明らかにしようとする行き方である、ということができようであろう。このような行き方をとるとき、特定の国のあるときの特質だけでなく、さらに、その変化も、理想型という尺度によって測定されることによって、われわれに明らかにされうることになるのである。

さて、わたくしは、かねてより、資本主義のさまざまな様相について、とりわけ企業の指導原理あるいは企業思想ないし産業思想における型に注目し、これについていくつかの理想型を形成し、このことによって資本主義の様相ないし現実を理解しようと考えてきた。³⁾わたくしのこのような問題意識

- 2) 理想型および理想型による認識と分類による認識との相違については、つぎを参照のこと。

拙稿「理想型」による認識と経営経済学の学派分類(一)『松山大学論集』第2巻第5号、平成2年12月。

拙稿「理想型と事実認識 — 「理想型」による認識と経営経済学の学派分類(二) — 」『松山大学論集』第6巻第6号、平成7年2月。

拙稿「理想型による認識と分類による認識 — 「理想型」による認識と経営経済学の学派分類(三) — 」『松山大学論集』第7巻第1号、平成7年4月。

- 3) このようなわたくしの努力は、かつて述べたように、わたくしの「経営学原理」の講義においてのみ展開されており、いまだ論文として公けにされてはいない。

このことについては、つぎを参照のこと。

拙稿「企業と進化の問題」『松山大学論集』第10巻第3号、平成10年8月。

からするとき、ヴェーバーのいう「(近代) 資本主義の精神」は、看過することのできない重要性をもっている。そこで、わたくしは、ヴェーバーの論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(Max Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I, I. Auflage, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 1920) を検討し、以下に論述しようとするのである。

とはいうものの、わたくしが以下に明らかにしようとするものは、わたくしの演習ノートである。ここに演習ノートとは、大学の演習で学生に説明するために作ったノートという意味に他ならない。

近年の大学におけるわたくしの演習ないしゼミナールでは、多くの場合、学生は共通のテキストを4年次まで読み、これを報告しつつ、卒業論文を作成する。しかも、この場合、ほとんどの学生は、テキストの要約をもって卒業論文とすることになってしまっている。かつては、学生は、ゼミナールが始まってから(これは、かつては3年次からであった)の最初の半年は、共通のテキスト(わたくしの場合、これは、ドイツ語で書かれた専門書であった)を読んでこれを報告するが、あとは自ら設定した研究テーマに関して中心となる専門の洋書を選定し、これを自ら読み要約してゼミナールで報告し、討論の過程を経、さらに関連する文献を参照して、卒業論文をまとめるというやり方をとっていた。だが、大学紛争から数年を経て、とりわけ決定的には共通一次入学試験以降、共通のテキストに洋書を用いることはもちろん、学生に自らテーマを選定させることさえ困難となり、近年では、和書、しかも、しばしば、一般的な案内書ともいふべきものを、学生と相談のうえ共通のテキストとして選定し、この論読を4年次まで続けて、これにもとづいて、ともかくも、ようやく「卒業論文」なるものをまとめさせることがせいぜいである、という事態になってしまった。このような状況のなかで、数年前、少数の学生が、一般的案内書ではなく、ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(大塚久雄訳、岩波書店)に興味を示し、これ

を共通のテキストの一つとすることを希望することになったのである。

ゼミナールにおいてこの書物の内容を学生に説明するに際して、わたくし自身は、数える者としての責任上、もちろん、訳書を、原書と照らし合わせて確認する必要があった。このような作業を続ける過程で、わたくしは、いかに名訳とはいえ、大塚訳に、理解しにくい個所、時には誤訳をも、いくつか見出すこととなり、そのため、わたくしは、ゼミナールの準備として原書についてかなり綿密なノートを取り、これにもとづいて学生に説明するやり方をとらざるをえないことになった。

これまで、わたくしの場合、ゼミナールのノートや講義ノートを作成する作業は、公刊されるべきいかなる論文をも生むことがなかった。いわゆる研究時間に比べて、そもそも比較にならないほど多くの時間が、演習と講義に、そして、とりわけこれらの準備に費やされ、ただ消えていった。その準備のために多大の時間を要するこれまでのゼミナールや講義のテーマのほとんどが、わたくしの「研究」テーマと直接に関わるものではなかったからである。近年、講義やゼミナール、すなわち授業が、あたかも研究なくして行われうるかのような主張をしばしば耳にするようになったが、このような授業が、たとえ公刊された論文や著書を生み出さなくとも、研究なしでは不可能であることは、真に授業をしたことのある者にとっては自明であろう。ただ、わたくしの場合、講義やゼミナールは、わたくしがその時々々に専門的に研究してきたテーマと少なくとも直接には関係しなかったのである。

今回、わたくしは、ゼミナールで輪読する書物がわたくしの当面する専門的研究テーマの一部に密接に関わるという幸運に恵まれることになった。そこで、わたくしは、ゼミナールの準備として作成するノートを、わたくしの研究の成果として印刷し公けにすることとしたのである。

さて、ここに公けにすることとなるノートについて、わたくしには、一つだけ、お断りしておかなければならないことがある。それは、ヴェーバーの上記論文についてのわたくしの演習が、いまなお継続中であり、そのため、

これからわたくしが公けにすることとなるノートは、演習の準備がこれから進行していくにつれて、少しずつ形成され印刷されることとなること、これである。

わたくしは、かつては、論文を完成させたあとで、これを時間をかけて読み直し、それから印刷に付すのをつねとしていた。とりわけ若い頃には、わたくしの学部、大学院時代を通じて教えを受けた藻利重隆博士のやり方に従って、論文が一度完成してから、通常、さらに約半年（藻利先生自身はたしか1ヶ月ほどといわれた）の間、これを毎日読み返し、自らの論文の欠点を自ら暴き出し修正するための作業を続けた。この作業を終わって論文を印刷に付すのは、その時の自分の能力ではこれ以上の修正はもはや可能ではないと、自ずから思われるようになる時であった。

だが、このようなやり方をとることは、40才を過ぎてからは、わたくしには、次第に困難となった。それでも、なおしばらくの間は、わたくしは、ともかくも、論文が完成してから若干の回数の読み直しをするというやり方を維持しはしたのである。

ところが、ここに公けにすることとなるものについては、わたくしは、このいささかだらしないうり方をさえ、とることができない。それは、わたくしの体力の著しい衰えに加えて、近年の日本においては、大学での仕事がますます煩雑になり、もともと少ない研究のための時間が、ますます少なくなってきたこと、さらに、わたくしの年齢を考えると、残された時間があまりにも少ないと思われること、による。このようにして、以下、論述を進めるにつれ、わたくしは、前に述べたものを後に注記して修正せざるをえないような事態に追い込まれることにもなるであろう。

ともあれ、論述を始めることとしよう。わたくしの論述はゼミナールとその準備の進行にしたがってなされるのであるから、わたくしの論述の順序は、当然ながら、基本的に、ゼミナールのテキストであるヴェーバーの論文自体の論述の順序に沿うことになる。ただ、説明の必要上、わたくしは、若干の

部分について、ヴェーバーの論述の順序を変えて、論述せざるをえないこともあるであろう。理解の正確を期するため、重要と思われる事項にはドイツ語の原語を付し、直接引用文については本文中に（ ）で原書のページを記することとした。とりわけ後者が、原文を参照される方の便宜のためであることはいうまでもない。そして、また、各節について、わたくしは、読者の便宜のために、ヴェーバーの論文自体にはない、さらに細かい題をつけることとした。

第一章 問 題

1. 宗派 (Konfession) と社会階層分化 (soziale Schichtung)

1-1. プロテスタントと近代企業の担い手との関連 — 職業統計にみる一現象 —

ヴェーバーは、職業統計に表れている現象に注目し、これについて一つの問題を提起することになる。かれがここに注目する現象とは、カトリックとプロテスタントが混在している地域では、近代企業 (die moderne Unternehmungen) の資本所有者 (Kapitalbesitz) および企業者 (Unternehmertum) ならびに上層の熟練労働者 (die oberen gelernten Schichten der Arbeiterschaft), このなかでもとくに高度の技術的および商業的予備教育を受けた従業員 (höheres technisch oder kaufmännisch vorgebildetes Personal), のまさに多数が、プロテスタントによって占められていること、これである。ヴェーバーによれば、このことは、ドイツのカトリックの新聞、文献そして会議においても、しばしば活発に論議されていることである。

われわれは、ここで、ヴェーバーのいわゆる近代企業が大規模近代工業商業企業 (die große moderne gewerbliche und Handelsunternehmungen) (S. 19) とも表現されているものであり、ヴェーバーの「今日の『高度資本主義』 (der h e u t i g e) Hochkapitalismus」(S. 18, fußnote 2) を代表する企業

として理解されるものであることに注意しなければならない。それは、後に述べるように、近代ヨーロッパにおいて人類の歴史上はじめて成立した資本主義ないし近代資本主義を代表する近代企業の、いわば歴史的展開をなすのである¹⁾。そして、また、われわれは、ヴェーバーにおいて、この企業の「企業者」が管理者 (Leitung) (S. 19) ともよばれているものであること、そして、上層の熟練労働者という労働者が、狭義の労働者 (Arbeiter im engeren Sinne) すなわち工場労働者ないし労務者のみならず事務職員 (Beamtentum) ないし職員 (Angestellte) をも含む (S. 22) 広義の労働者ないし従業員 (Belegschaft) を意味し、したがって、上層の熟練労働者が、この広義の労働者のうちの上層を意味することにも、とくに注意しておくべきであろう。

ヴェーバーによれば、職業統計の数字に現れるプロテスタントと近代企業の上部の社会階層との関連という上記の現象は、ドイツ東部におけるドイツ人とポーランド人との間にみられるように、宗派の相違と国籍したがって文化の発展度合の相違とが一致するような地域においてのみ、みられるわけではない。それは、およそ近代資本主義の開花期に、住民が、その欲求にしたがって自由に社会階層を移動し職業分化をなすことができたところでは、ほとんどどこにおいてもみられうるのであり、しかも、この自由な社会階層の移動と職業分化とが著しかったところにおいては、より一層明確にみられうるのである。

ヴェーバーは、このような宗派と社会階層分化との関連という現象に注目

1) そこで、ヴェーバーの時代におけるこの歴史的展開としての企業は、すでに、近代ヨーロッパにおいてはじめて成立したころの近代企業と必ずしも同一ではない。両者の相違の一つは、ヴェーバーからみて「今日の『高度資本主義』が、総じて、とりわけその労働者の大部分を占める下層の不熟練労働者について、かつて宗派がもちえたであろうと思われるような影響を、もはや受けなくなっている」(S. 18, fupnote 2) ことに求められうるであろう。

し、この現象がいかなる理由によって生じることとなったか、を問うことになる。

1-2. プロテスタントと近代企業の担い手との関連の原因としての経済的現象

さて、ヴェーバーによれば、大規模近代工業商業企業の資本所有者、管理者および上層労働者（die oberen Stufen der Arbeit）におけるプロテスタントの数が相対的に大きいこと、すなわち、それらにおいてプロテスタントの占める比率が総人口においてプロテスタントの占める比率をはるかに上回っていることは、部分的には、たしかに遠い過去に起源をもつぎのような歴史的理由による、と考えることができる。

上記のような経済的職能（ökonomische Funktion）に与かるには、この前提として、資本の所有か、お金のかかる教育か、そして、大ていの場合にはこの両方が、必要とされるのであり、したがって、それは、今日では、遺産の相続者か、ある程度の富裕者がなしうることなのであるが、今日、このような人々の多くがプロテスタントであることは、かつて富裕者の多くがプロテスタントに帰依し、このことが、その後、プロテスタントを上記の経済的職能に就かせるのに有利に作用してきたというのが、これである。

まさに16世紀に、自然と交通事情とに恵まれて経済的に最も発展をとげたきわめて裕福な地域の多く、とりわけ最も富裕な都市の多数において、人々がプロテスタントに帰依したのであるが、このことは、その後において、プロテスタントを経済的に有利にするという効果をもたらしてきた。この後にまで及ぶ効果（die Nachwirkungen davon）は、今日においても、なお、経済的生存競争（der ökonomische Kampf ums Dasein）においてプロテスタントを有利にしているのである。

ヴェーバーによれば、以上のような歴史的理由をあげる行き方は、ある程度ではあれ、人々がプロテスタンティズムに帰依するという宗派的帰属

(die konfessionelle Zugehörigkeit)²⁾ を、人々が裕福であるという経済的現象の結果とする考え方に立つものであって、宗教的帰属がこの経済的現象の原因であるという考え方に立つものではない。

ここに、われわれは、以上のような歴史的理づけが、「上部構造（思想ないし宗教）は、下部構造（経済）によって規定される」とする唯物史観に沿うものである、とするヴェーバーの考え方を、容易に看取することができるであろう。そして、この場合、われわれが注意しておかなければならないのは、唯物史観に沿うこのような因果関連の考え方を含む上記の歴史的理づけを、ヴェーバーが、部分的には、妥当なものとして認めていることである。

だが、われわれは、また、ここで、つぎのことにも注意しなければならない。それは、以上の歴史的理づけにおいては、過去において裕福な人々の多くがプロテスタンティズムに帰依したことが指摘されているが、その際、かれらが何故にプロテスタンティズムに帰依したのかが、まったく述べられていないことである。このことは、この歴史的理づけが、問題が過去にさかのぼることを指摘するだけで、問題自体には解答していないことを意味する。富裕な人々の多くがかつてプロテスタンティズムに帰依したことが指摘されるのであれば、かれらが、そのとき何故にプロテスタンティズムに帰依したのか、が問われ、これに解答が与えられなければならないはずである。

そこで、ヴェーバーは、以上のような歴史的理づけについて、つぎのような歴史的疑問を提起することとなる。すなわち、上記の経済的に最も発展した地域の人々が教会革命（eine kirchliche Revolution）を受け入れる、すなわちプロテスタンティズムに帰依する、特別に強力な素質（Prädisposition）をもっていたのは何故か、と。そして、ヴェーバーによれば、この疑

2) 原文では、Konfessionelle となっている。

Vgl. M. Weber, Die protestantische Ethik. S. 19.

問に答えることは、一見簡単にみえるが、実際には、けっしてそうではないのである。

1-3. プロテスタントと近代企業の担い手との関連の原因としての伝統主義の払拭
 ヴェーバーによれば、この疑問に対しては、**経済的伝統主義** (der ökonomische Traditionalismus) の払拭を一つの要因としてあげる考え方をとることができるようにも思われる。すなわち、上記の地域の人々は、いうまでもなく、**経済的伝統主義**を払拭して近代資本主義の担い手となったのであるが、かれらにおける**経済的伝統主義**の否定は、また、かれらに**宗教的伝統** (die religiöse Tradition) に対する疑念をも懐かせるようになり、カトリック教会という伝統的権威そのものへの反抗を、まさに本質的に支援したのだ、というのが、これである。

しかし、ヴェーバーによれば、このように答えようとする場合には、今日ではしばしば忘れられているつぎのことが考慮されなければならない。それは、宗教改革 (die Reformation) が、人々の生活 (das Leben) に対する教会による支配 (die Herrschaft) を排除し、この点で人々の生活を自由にしたわけではないことである。宗教改革は、人々の生活に対する教会による支配のそれまでの形態に代わって、教会による支配の**新しい形態**をもたらしたにすぎない。それは、人々の生活に対する教会による支配をなくしたのではなく、ただ、支配の形態を転換しただけなのである。しかも、ここで重要なことは、教会によるそれまでの支配が、極めて楽で、当時の実生活においてほとんどそれと感ぜられないほどの支配、しばしば、ほとんど単なる形式ともいべき支配だったのに対して、これにとって代った新しい支配は、実に、家庭生活および公的生活のあらゆる局面に考えられうる限り最も広く立ち入る、無限に煩わしく真剣な、**生活態度全体の規制** (die Reglementierung der ganzen Lebensführung) であったこと、これである。

ヴェーバーによれば、カトリック教会による支配は、かつては今以上に、

「異端者には厳罰をもって臨むけれども、カトリックのなかの罪人に対しては寛大」であった。カトリック教会による支配に服することには、今日、すっかり近代的経済の外観を呈してしまっている諸国民でも、まったく困難を感じていないのであるが、同様に、15世紀の終り頃に生きていた著しく裕福な、経済的に最も発展していた地域の人々も、それに困難を感じていなかった。これに対して、プロテスタンティズムによる支配、とりわけ16世紀のジュネーヴとスコットランド、16世紀末と17世紀のオランダの大部分、17世紀のニュー・イングランド、そして17世紀のしばらくの間イングランドそのもので有力となったカルヴィニズムの支配は、これまでに存在しえた教会による個人の統制 (die Kontrolle) のなかで、われわれにとって、まさに最も耐え難いものであろうと思われるのであるが、事実、それは、当時のジュネーヴ、オランダおよびイングランドの古い都市貴族 (Patriziat) の広範な層の人々にとっても、そう感じられていたのである。

しかも、ヴェーバーによれば、それだけではない。まさに経済的に最も発展した諸国の宗教改革者たちは、教会によるこのような厳しい支配にさえ満足していなかった。かれらは、人々の生活に対する教会ないし宗教の支配 (die kirchlich-religiöse Beherrschung) が過大であるとは、まったく考えていなかった。それどころか、かれらは、それが過小であるといって非難していたのである。

ヴェーバーの論述をこのように辿ってくる時、われわれには、経済的伝統主義の支配からの自由が、宗教的伝統主義の支配からの自由をもたらし、この自由が、プロテスタンティズムへの帰依をもたらしたのだ、と単純に考えることはできないことが明らかになるであろう。なぜなら、ここに宗教的伝統主義からの自由とみえるものは、けっして、第一に、宗教の支配そのものからの自由でないことはもちろん、第二に、より自由な宗教的支配への移行ですらなく、まったく逆に、比類なく厳しい宗教的支配への服従を意味するものであったからである。

しかも、なお、それだけではない。ヴェーバーによれば、上記の経済的に最も発展した地域の人々、なかでも、まさに、当時経済的に興隆しつつあった「市民的」中産階級（die damals ökonomisch aufsteigenden）bürgerlichen（Mittelklassen）は、かれらがそれまで知らなかったこの清教徒的専制支配（die puritanische Tyrannei）を、ただ甘受したわけではない。この市民階級（bürgerliche Klassen）は、カトリックの弾圧から、この清教徒的専制支配を護るために、かれらが、それまでほとんど示したことがなく、その後についてはまったく示したことがないほどの英雄的行為（Verteidigung）、カーライル（Carlyle）がいう「われわれの英雄的行為の最後のもの（the last of our heroisms）、を展開したのである。

そこで、ヴェーバーによれば、いまや、つぎのことが問われなければならないこととなる。上記の経済的に最も発展した地域の人々が、厳しい清教徒的専制支配を進んで受け入れたのは、何故か。とりわけ、かれらのうちの市民的・中産階級が、清教徒的専制支配を護るために、かれらの歴史においてほとんど比べるものない英雄的行為を展開したのは、何故か。

以上を要するに、ヴェーバーにおいては、近代企業の資本所有者、管理者そして上層労働者の圧倒的多数がプロテスタントであることの理由を、かつて経済的に最も発展した地域における富裕者の多くがプロテスタントに帰依し、その後、これらプロテスタントが相対的に多くの富を受け継いできているという歴史的・理由に求める行き方は、かれら富裕者が、何故に、かつて、一方で経済的・伝統主義の支配からの解放をなし遂げたにもかかわらず、他方で、その宗教については、カトリックの伝統主義よりもはるかに厳しいプロテスタントの束縛に進んで服したのか、という新たな問題を提起することになるのである。

さらに、ヴェーバーによれば、上記の歴史的・理由に関しては、つぎのことが問題となる。

それは、「既述のように、今日、近代経済（die moderne Wirtschaft）（＝

近代企業－笠原)の内部で資本所有者および管理者の地位 (leitende Stellungen) (および上層労働者の地位－笠原³⁾) により多くのプロテスタントが見出されることが、部分的には、ただ、これらの人々が歴史的に平均してより多くの財産を受け継いできていることの結果であることを認めうとしても、他方で、このような因果関係が明らかに当てはまらない諸現象が存在すること」(S. 21), これである。

1-4. プロテスタントと近代企業の担い手との関連の原因としての近代教育志向

ヴェーバーは、このような諸現象のうちの、いくつかのみを示そうとする。まず、第一にかれが示そうとするものは、パーデン、バイエルンそしてハンガリー等で一般に認められうるのだが、カトリックの両親がその子弟に与えようとする比較的高等な教育が、プロテスタントのそれと種類を異にすることである。

比較的高等な教育諸機関における生徒および大学入学資格試験受験者のなかで、カトリックの占める割合は、全体としてプロテスタントのそれよりかなり低いのであり、このことは、たしかに、かなりの部分、プロテスタントの方が、カトリックに比べて、平均してより多くの財産を受け継いでいるという上述の事情による、ということができらるであらう。

しかし、カトリックの大学入学資格試験受験者の内部についてみると、近代的な教育諸機関、すなわち技術的研究や工業・商業的職業のための予備教育を特別に意図して形成されている教育機関や、総じて市民的営利生活 (ein bürgerliches Erwerbsleben) のために設置されこれに適している教育

3) ここにいう leitende Stellungen は、これが複数であることからみて、上層労働者の地位を含むものとしても理解されうる。このように理解される場合には、さきに述べられた Leitung は、最高管理者を意味し、これから区別された上層労働者が、そのうちに中間管理者そしてまた下級管理者を含む、というより、むしろ、上層労働者が、概して、これら中間、下級の管理者から成ると考えられているものと解釈できること、が注意されなければならない。

機関、例えば、実業高等学校（Realgymnasien）、実業学校（Realschulen）、高等小学校（höhere Bürgerschulen）等、からの出身者の割合が、プロテスタントの大学入学資格試験受験者の内部でのこの割合と比べて、際立って低い、という現象がある。そして、他方において、カトリックは古典語高等学校（die humanistischen Gymnasien）の予備教育を好む、という現象が存在するのである。これらの現象は、上述の近代経済における資本所有者、管理者および上層労働者の多数を占めるプロテスタントが歴史的に平均してより多くの財産を受け継いできていることをもっては、説明されえない。ヴェーバーによれば、これらの現象は、逆に、資本主義的営利（kapitalistischer Erwerb）に携わるカトリックの割合が小であることの理由として考えられなければならない。

ヴェーバーのこのような論述は、一方で、平均的により多くの財産を受け継いできているか否かという歴史的かつ経済的事情が、たしかに、比較的高等な教育を受けることができるか否か、を規定する要因の一つであることを認めつつも、他方で、そのような歴史的かつ経済的事情とは別個に、プロテスタントが市民的営利生活を志向すること、そして、プロテスタントがこの市民的営利生活のために設けられた近代教育を受けようとする、これに対して、カトリックが市民的営利生活を志向しないこと、そして、カトリックが市民的営利生活のための教育とは異なる伝統教育を受けようとする、を示す現象が存在すること、を指摘するものである。ここでは、同じく比較的高等な教育を受けることのできる財産をもつ人々の内部についての考察によって、プロテスタントが資本主義的営利に携わる生活とこのための教育とを志向するのに対し、カトリックが伝統的生活とこのための教育とを志向するという両者の志向の相違が明らかにされていることが注意されなければならない。

このようにプロテスタントが資本主義的営利生活とそのための教育を志向し、カトリックが伝統的生活とそのための教育を志向するとき、われわれは、

また、プロテスタントとカトリックとのこの志向の相違が、プロテスタントをカトリックよりも富裕とすることになることを理解することができるであろう。

このように考えるとき、われわれは、平均的により多くの財産を受け継いできているか否かという歴史的かつ経済的事情が、プロテスタントかカトリックかという宗派的帰属を規定することよりも、むしろ、逆に、プロテスタントかカトリックかという宗教的帰属のいかんこそが、両者の教育と職業の選択を規定し、このことによって両者における財産所有の相違を生み出してきたのではないかと推測することもできるのである。そして、このように考えるとき、われわれは、また、カトリックに比べてプロテスタントの方が、平均的により多くの財産を受け継いできていることにより、比較的高等な教育を受ける者の割合が大であること、の理由自体をも、理解することができるであろう。

ここで問題となるのは、一方で、プロテスタントを資本主義的営利生活とこのための近代教育に向かわせ、他方で、カトリックを伝統的生活とこのための伝統教育に向かわせることとなるものは何か、これである。

1-5. プロテスタントと近代企業の担い手との関連の原因としての近代企業志向

近代企業ないし大規模近代工業商業企業の資本所有者、管理者および上層の熟練労働者に著しくより多くのプロテスタントが見出されることは、これらの人々が平均してより多くの財産を受け継いできていることによる、という因果関係が当てはまらない現象として、ヴェーバーが第二に示すものは、とりわけ近代大規模工業企業 (die moderne Großindustrie) の熟練労働者に関するものである。ヴェーバーによれば、この第二の現象は、第一の現象より目立つものである。

ヴェーバーによれば、近代大規模工業企業の工場 (die Fabrik) がその熟練労働者のかなり多くを手工業 (Handwerk) からの出身者 (Nachwuchs)

によって賄っていること、したがって、その労働者の予備教育を手工業に任せ、予備教育が完了してから採用することは、よく知られていることであるが、この現象は、カトリックの手工業職人 (Handwerksgesellen) に比べて、プロテスタントのそれについて、はるかに際立っている。すなわち、手工業職人のうち、カトリックのそれは、手工業に残ろうとするより強い志向 (Neigung) をもち、したがって、比較的多くのものが手工業親方 (Handwerksmeister) になるのに対して、プロテスタントのそれは、より多くのものが近代大規模工業企業の工場に流れ込み、ここで、熟練労働者の、そして工業における事務職員の、上層の地位 (die oberen Staffeln der gelernten Arbeiterschaft und des gewerblichen Beamtentums) に就こうとするのである。

このような現象は、プロテスタントが、カトリックに比べて、より多くの財産を受け継いできている、ということによって説明できるものではない。このことは、われわれが容易に理解できることであろう。なぜなら、ここでは、プロテスタントとカトリックとの間にみられる財産の多寡の相違ではなく、両者における人間としての労働者の志向の相違ないしは精神的特徴の相違が、まさに、両者の職業における進路の選択の相違をもたらしていることが明らかだからである。

この場合、われわれは、人間の精神的特徴が、幼いころからの広義の教育によって形成されると考えることができるのであり、しかも、ここでは、プロテスタントとカトリックの精神的特徴の相違をもたらす教育が問題なのであるから、われわれは、ここに、それぞれの教育に対する宗派的影響を問題とせざるをえない。

そこで、ヴェーバーはいう。

「これらの場合には、因果関係は、疑いもなく、こうだ。すなわち教え込まれて形成された精神的特徴 (die anerzogene geistige Eigenart), しかもここでは郷土や両親による家庭の宗教的雰囲気によって規定

された教育の方向が、職業選択とその後の職業的運命を決定してきたのである。」(S. 22)

この場合、われわれは、「郷土や両親による家庭の宗教的雰囲気によって規定された教育の方向」が、ヴェーバーがさきに示した現象、すなわち、カトリックの子弟がプロテスタントの子弟に比べ、技術的研究や工業-商業的職業のための予備教育を特別に意図して形成されている教育機関や、総じて市民的営利生活のために設けられている教育機関における教育、すなわち近代教育、ではなく、古典語高等学校における教育、すなわち伝統教育、を好む、という現象をも説明しうることに留意しておくべきであろう。

そして、われわれが、ここでさらに注意しておくべきことは、ここには、経済ないし下部構造が宗教ないし上部構造を規定するという関係だけではなく、逆に、上部構造が下部構造を規定するという関係が存在しうる、というヴェーバーの考え方が、すでに示されていることである。

1-6. プロテスタントと近代企業の担い手との関連の原因としての経済的合理主義

さて、「今日、近代経済の内部で資本所有および管理者の地位（および上層労働者の地位-笠原）により多くのプロテスタントが見出されることが、……これらの人々が歴史的に平均してより多くの財産を受け継いできていることの結果である」という「因果関係が明らかに当てはまらない諸現象」としてヴェーバーが第三にあげるものは、「ドイツにおいては、近代的営利生活（das moderne Erwerbsleben）に携わるカトリックの割合が比較的に小さい」という事実が、「その他の国で、昔から、そして今もなお、みられる経験に反する」(S. 22) こと、これである。

ここに「その他の国で、昔から、そして今もなお、みられる経験」とは、『支配者』としての他の集団と対比される『被支配者』としての集団である民族的または宗教的少数者は、自発的にせよ非自発的にせよ、政治的に影響力のある地位から閉め出されること^よ^う^なら^ず、まさに特別に著しい程度に

営利の道に駆り立てられるものであり、かれらのうちでとりわけ才能に恵まれた者は、政治の舞台で満たすことのできない名誉欲を、営利の舞台で満たそうとすること」(SS. 22-23)、これである。

この経験は、ポーランド人が支配者であるガリシアと対照的に、かれらが被支配者であるロシア、東プロイセンにおいて、ポーランド人が疑いもなく経済的繁栄の道を進んでいることのうちに明白であるし、さかのほれば、ルイ14世時代のフランスにおけるユグノーに、イギリスの非国教徒およびクエーカー教徒に、そして、2000年このかたのユダヤ人について、みられうるのである。

ところが、ヴェーバーによれば、宗教的少数者である現在のドイツのカトリックの場合には、このような経験は、当てはまらない。また、過去について、しかもドイツ以外についてみると、プロテスタントと異なり、カトリックは、カトリックが迫害されていたか、または、ただ許容されていたにすぎない時代の、オランダにおいてもイギリスにおいても、とくに際立った経済的發展を示したわけではない。

むしろ、事実上、「プロテスタント（そのなかでも、のちに特別に取り扱うことになる諸派(Richtungen)は、これが支配層であると被支配層であるとかかわらず、または多数者であると少数者であるとかかわらず、経済的合理主義(der ökonomische Rationalismus)への特殊な愛着(Neigung)を示してきている」(S. 23)のに対して、このようなことは、カトリックについては、これが支配者または多数者である場合にも、被支配者または少数者である場合にも、いまだかつてみられないのである。

このように、ヴェーバーは、プロテスタントとカトリックについては、「支配者または多数者に対する被支配者または少数者が、政治的影響力のある地位から閉め出されることによって、営利の道に駆り立てられ、政治の舞台では満たすことのできないその名誉欲を、営利の舞台で満たそうとする」という、昔から現在に至るまでみられる経験が当てはまらないことを指摘する。

プロテスタントは、支配者または多数者である場合にも、逆に被支配者または少数者である場合にも、一貫して営利の道を進もうとする行動を示すのに対して、カトリックには、このような行動はみられないのである。

プロテスタントとカトリックとの間のこのような行動の相違は、プロテスタントがカトリックに比べて平均的により多くの財産を受け継いできているという歴史的、経済的事情のみによっては説明できない。さらに、それは、以上に明らかなように、両者が置かれた政治的境遇の相違のみによっても説明することができない。両者の行動の相違は、このような外面的境遇の相違のみによってではなく、むしろ、両者それぞれの宗派がもつ内面的特質の相違によって説明されなければならない。

そこで、ヴェーバーはいう。

「したがってこれら(=プロテスタントとカトリック—笠原)の行動の相違の根拠は、主として、これらの宗派の持続的な内面的特質のうちに求められなければならないのであり、これら宗派のその時々^のの外面的な歴史的—政治的境遇のうちにのみ求められてはならない。」(S. 23)

このようにして、ヴェーバーは、プロテスタントとカトリックとの間にみられる社会階層の相違の原因が、いまや、むしろ、それぞれの宗派の内面的特質のうちに探究されなければならないことを主張することになる。

1-7. プロテスタントと近代企業の担い手との関連の原因としての「現世性」

ヴェーバーは、プロテスタントとカトリックとの間にみられる社会階層の相違の原因をそれぞれの宗派の内面的特質のうちに探ろうとするに際して、まず、つぎのことを問う。それは、それぞれの宗派の内面的特質のどのような要素が、一方のみを近代資本主義的営利の道に進ませるよう作用してきており、また、いまでも部分的に作用しているのか、という問いである。

この間について、ヴェーバーは、これを表面的に考察する場合になされうる答えとして、近代における一定の印象的諸事象(Eindrücke)にもとづく、

つぎのような考えを呈示する。すなわち、プロテスタントとカトリックの宗派の内面的特質の相違は、プロテスタンティズムに比べてカトリシズムがより大きく「非現世性」(Weltfremdheit)をもっているところにあり、カトリシズムの最高の理想であるこの禁欲的特質が、プロテスタントに比べてカトリックを、この世の財貨(Güter)に対してより無関心になっているにちがいない、と。

ヴェーバーによれば、このような理屈は、実際のところ、今日(=もちろん、ヴェーバーがこの論文を書いていた当時—笠原)、両宗派についての一般に人気のある判断図式にも一致している。それは、プロテスタントの側からは、カトリックに対して、カトリックの生活態度(Lebensführung)のあの(実際のまたは見せかけのうでの)禁欲的理想を批判するとき用いられるし、これに対してカトリックの側からは、プロテスタントに対して、プロテスタンティズムによって生活内容のすべてが世俗化(Säkularisation)された結果として「物質主義」(Materialismus)が生じた、という非難が応酬されるのである。

近代における学者の一人であるオッフェンバッハー(Offenbacher)博士も、営利生活(Erwerbsleben)に対する態度において顕になる二つの宗派の相違は、つぎのように定式化されるべきだ、と信じている。すなわち、「カトリックは、…より静かである。カトリックは、営利衝動(Erwerbstrieb)をより少ししか有しておらず、たとえ所得がより少ししか得られなくても、できるかぎり安全な生活の方を、危険で刺激的だがときに名誉と富をもたらす生活よりも、重視する。俗言にも、たらふく食うか、静かに眠るか、と冗談まじりにいうではないか。この場合、たらふく食おうとするのはプロテスタントであり、静かに眠ろうとするのはカトリックである。」と。

ヴェーバーによれば、「たらふく食おうとする」というこの言い方は、実際のところ、ドイツにおける、そして現在の、プロテスタントのうちで教会に無関心な部分の人々の動機を、全面的にとはいえないが少なくとも部分的

には、正しく特徴づけている。

だが、過去においては、ドイツにおける事情は著しく異なっていた。そして、また、イギリス、オランダそしてアメリカの清教徒が、「現世の喜び (Weltfreude)」とは正反対の特徴をもっていたことは、周知のことである。

(ヴェーバーによれば、清教徒のこの特徴は、かれがのちにも述べるように、清教徒の特質のなかで、かれのこの論文において最も重要なものの一つである。)

それだけではない。ヴェーバーによれば、例えばフランスのプロテスタンティズムは、一般的にカルヴィン派の教会、そしてとりわけ信仰斗争 (Glaubenskämpfe) の時代に「十字架のもとに」あったそれが、いたるところで明確に示した特徴を、非常に長い間もち続け、ある程度は、じつに今日に至るまで保持している。そして、フランスのプロテスタンティズムは、それにもかかわらず (というより、おそらく、まさにそれゆえにはではないかと、ヴェーバーは問い続けることになるであろう)、周知のように、フランスにおける工業的そして資本主義的發展の最も重要な担い手の一つであったし、迫害を生き延びた小さな規模においては、今でもそうなのである。

このように、ヴェーバーによれば、現在のドイツのプロテスタントのうちで教会に無関心な一部の人々を別とすれば、プロテスタントは、過去においては、いくつかの国で、「現世の喜び」とは正反対の特徴をもっていたし、部分的には、現在でも、このような特徴をもっている。そして、この特徴は、フランスのカルヴィン派の信徒にとりわけ顕著な特質であったし、今でもそうなのである。

ヴェーバーによれば、フランスのカルヴィン派信徒にとりわけ著しいこの特質、すなわち生活態度における真面目さ (Ernst) と宗教的関心の強力な支配 (das starke Vorwalten religiöser Interessen) を「非現世性」 (Weltfremdheit) とよぶならば、フランスのカルヴィン派信徒は、例えば、この世に比類ないほどにカトリシズムを信仰する (Herzensache sein) 北ド

イツのカトリックと、少なくとも同じほど非現世的だったし、いまもなお、非現世的である。

一方において、フランスのカルヴィン派信徒は、著しく生活享樂的な下層とあからさまに宗教を敵視する上層からなるカトリックという、フランスにおいて優勢な宗教的党派 (Religionspartei) の行き方に対抗しており、他方において、北ドイツのカトリックは、今日、現世の営利生活において興隆しつつあり、その上層においては主として宗教に無関心なプロテスタントという、ドイツにおいて同じく優勢な宗教的党派の行き方に対抗している。フランスのカルヴィン派信徒と北ドイツのカトリックは、このように、支配的な宗教的党派の現世的方向に対して非現世的方向をとる点においては、同じなのである。

ヴェーバーによれば、フランスのカルヴィン派信徒と北ドイツのカトリックとの間のこの同方向性 (diese Parallele) ほど、いわゆる「カトリシズムの非現世性」、いわゆる「プロテスタンティズムの物質主義的『現世享樂 (Weltfreude)』』といった曖昧な観念のいかがわしさを明らかにするものはない。そのような観念およびこれに似た数多くの観念は、以上のような一般的考察においてすでに、一つには今日においてもなお当たっていないし、さらには、少なくとも過去においてはまったく当たっていないことが明らかなのであり、これらの観念をもって、ここでの研究を始めることは不可能なのである。

ヴェーバーによれば、それにもかかわらず、仮に、これらの観念をもって考察を進めていこうとするならば、そのときには、上に記したこと以外に、さらに多くのことがらが直ちに明らかにならざるをえず、そして、結局は、つぎのような考えさえもが頭に浮かんでこざるをえないであろう。すなわち、一方における非現世性、禁欲 (Askese) そして教会的信心深さ (kirchliche Frömmigkeit) と、他方における資本主義的営利生活への参加との間には、完全な対立ではなく、逆に、内面的親和性 (eine innere Verwandtschaft)

がある、と考えられるべきではないだろうか、と。

1-8. プロテスタントと近代企業の担い手との関連の原因としての「非現世性」

このようにして、ヴェーバーは、プロテスタントとカトリックのそれぞれの宗派の内面的特質のどのような要素が、プロテスタントのみを近代資本主義的営利の道に進ませるよう作用してきており、また、いまでも作用しているのか、という問いに対する答えとして、プロテスタンティズムに比べてカトリシズムが「非現世的」ないし「禁欲的」であり、この特質がプロテスタントに比べてカトリックをこの世の財貨に対して無関心に行っているという、一般に人気のある判断図式に一致する考え方を斥ける。そして、かれは、この考え方とは逆に、プロテスタンティズムにおいては、その非現世性ないし禁欲こそが、近代資本主義的営利生活への参加と何らかの内面的結びつきを有しているのではないか、という、一見したところ、矛盾する見解ともいわれざるをえないような仮説を提示するのである。

そして、ヴェーバーは、このような仮説を提示する理由を、以下のように述べる。

まず、いくつかのまったく外面的な要因を述べるとすれば、キリスト教の信仰 (Frömmigkeit) のまさに最も内面的な諸形態の代表者のうちの非常に多数の人々が、商人の層 (Kreis) から出ている、という顕著な事実があげられる。とくに敬虔派 (Pietismus) は、その最も熱心な信奉者 (Bekenner) の著しく多数を、商人の層からの出身者に依っている。このことは、上記のような仮説を提示することに対して、これを支持する要因の一つとなりうるであろう。

もっとも、ヴェーバーによれば、これに対しては、つぎのような、内面的要因に立ち入った反論があるかもしれない。— キリスト教の信仰の最も内面的諸形態の代表者の非常に多くが商人の層から出ているのは、商人の層のなかで、内面的で商人の職業に適していない性格をもつ人々に対して、「拝

金主義 (Mammonismus)」がなした一種の反作用だと。たしかに、アッシジのフランシス (Franz von Assisi) や商人層から出た敬虔派信徒の多くについては、その「改宗」の経緯は、しばしば、改宗者自身によって、そのようなものであったことが述べられている。そして、このような反作用が存在しうることは、セシル・ローズ (Cecil Rhodes) にいたるまで、牧師館からずばぬけた資本主義的企業者が生まれているという、際立って頻繁にみられる、上例とは逆方向の反作用、すなわち禁欲的な青少年教育の反作用、というべき現象からも、理解されうるのである。

しかしながら、このようなありうる反論は「卓越した資本家の事業感覚 (ein virtuoser kapitalistischer Geschäftssinn) と全生涯を貫いて規制する信仰の最も強烈な形態とが、同一の人間および人間集団のうちにともに存在する場合」(S. 26) を説明することができない。しかも、このような場合は、ヴェーバーによれば、稀ではない。それどころか、それは、まさに、歴史的に最も重要なプロテスタントの諸々の教会および諸々の小教団 (Sekte) の諸集団のすべてにみられる極めて著しい特徴をなすのである。

とりわけカルヴィン主義は、これが登場したところではつねに、上記二つのものの結合を示している。カルヴィン主義は、プロテスタンティズムの諸宗派が一般にそうであるように、たしかに、宗教改革の拡張期には、どの国においても、特定の一階級と結びついていただけではない。しかし、例えば、フランスのカルヴィン主義教会であるユグノー派教会において、僧侶とともに産業人 (Industrielle) すなわち商人と手工業者が、はじめから数の面できとくに著しく改宗者を代表していたこと、そして、とりわけ迫害の時代において、かれらが改宗者の代表でありつづけたことは、カルヴィン主義の特徴というべきであり、ある意味でカルヴィン主義に「典型的 (typisch)」というべきことである。さらに、また、スペイン人は、かれらのいう「異端」すなわちネーデルランドのカルヴィン主義が、「商業精神 (Handelsgeist) を促進する」ことを知っていたのであるが、スペイン人のこのような見解は、

サー・W.ペティ (Sir W. Petty) がネーデルランドにおける資本主義の興隆の原因についての詳論において述べたところと、まったく一致する。ゴータイン (Gothein) は、他宗派の領域に散住する小宗派としてのカルヴィン派信徒 (die calvinistische Diaspora) を「資本主義経済の育苗所 (Pflanzschule der Kapitalwirtschaft) とよんでいるが、これは正当である。

もっとも、ヴェーバーによれば、ここで、つぎのように考えることができるかもしれない。すなわち、カルヴィン派信徒のこのような散住の主な発生源であるフランスとオランダの経済的文化が抜きん出て優れていたことこそが、カルヴィン派信徒が並はずれた資本家の事業感覚をもっていたことに対して決定的であるし、⁴⁾ または、さらに、カルヴィン派信徒がその故国から追放され、伝統的生活関係から引き離されてしまったことの強力な影響も、決定的である、⁵⁾ と。

ヴェーバーによれば、フランスだけをとってみても、コルベールの斗争から知られているように、17世紀においては、事態はまったくその通りだった。そして他の国々については言わないとしても、オーストラリアさえ、折にふれ、プロテスタントの工場主 (Fabrikant) を直接に受け入れたのである。

ただ、ヴェーバーによれば、ここで注意しなければならないことは、経済的文化が卓越していたことによる資本家の事業感覚の卓越性と伝統的生活関

4) ナントの勅令の廃止 (1685年) によってフランスから亡命したカルヴィン派信徒が、亡命先の国で、いかに産業の発展に貢献したかについては、例えば、このことをイギリスについて述べたつぎの書物を参照されたい。天川教授によれば、10万人ものユグノー亡命職人は、イギリスで、繊維工業をはじめ重工業その他においてさまざまな「新興工業」を生み出し、イギリスの産業の発展と、これと相対的に、フランスのその衰退とを、もたらしたのである。

天川潤次郎著『デフォー研究』、未来社、1966年、14～15、29、30ページ、および、とりわけ33～35ページ。

5) ヴェーバーは、故郷から離れた地に住むという単純な事実が、人間をいかに強力に働かせるよう作用するかについて、ザクセンへ出稼ぎに来たポーランド人少女、イタリア人の出稼ぎ労働者、アメリカへの移民、バビロン捕囚時のユダヤ人等の例をあげている。Vgl. M. Weber, Die protestantische Ethik. S. 27～28, fußnote 3)

係から引き離されたことによる資本家の事業感覚の卓越性が、カルヴィン派と他のプロテスタンティズム諸宗派 (Denominationen) とを比べると、同じ強さでは現れていないことである。

上記の効果は、カルヴィン派については、ドイツにおいても同様にみられるようである。すなわち、その諸形態のほとんどが多少の差はあれ緩和されたカルヴィン主義ないしツウィングリ主義 (ein mehr oder minder temperierter Calvinismus oder Zwinglianismus) である「改革」派 (reformierte Konfession) は、ヴッパータールその他の地において、他のプロテスタント宗派 (Bekenntnisse) に比べて、資本主義の精神の発展を促進したようにみえるのである。このことは「改革」派を、例えばルター派 (Luthertum) と、全体的に、また個別的とくにヴッパータールについて、比較するとき、明らかであるようにみえる。スコットランドについては、バックル (Buckle) およびイギリスの詩人のなかでもキーツ (Keats) が、このことを強調している。

このようにみえてくるとき、われわれは、プロテスタンティズムのなかでもとくにカルヴィン主義の信徒が自らのうちに卓越した資本家の事業感覚と信仰の最も強烈な形態とを兼ね備えていることの決定的理由を、フランスとオランダの経済的文化的卓越性と伝統的生活関係からの剝離に求めることに、躊躇せざるをえないであろう。

ヴェーバーは、宗教による生活の規制と事業感覚の著しく高度な発展との関連をより明確に示すものとして、カルヴィン主義の他に、さらに、その富と「非現世性 (Lebensfremdheit)」で有名な諸々の小教団のすべて、なかでもクエーカー派とメンノー派をあげる。クエーカー派はイギリスおよび北アメリカにおいて、メンノー派はオランダおよびドイツにおいて、上記関連を示したのである。メンノー派については、東プロイセンでフリードリッヒ・ヴィルヘルム I 世 (Friedrich Wilhelm I.) さえもが、兵役を一切拒否したメンノー派を、これが産業の不可欠の担い手であるからという理由で、容

認したことは、単なる一つの事実ではあるが、しかし、この国王の性格を考
えるとき、まさに、上記関連を例示する数多くの事実のなかで、最も強力な
事実の一つである、といわれざるをえないのである。

ヴェーバーは、強力な信仰と、同じく強力で発展した事業感覚と事業成果
との結合を示す例として、最後に敬虔派をあげ、これについては、ラインお
よびカルヴの事情を想起すれば十分である、とする。

われわれは、以上の例から、ヴェーバーが、「プロテスタンティズムに比
べてカトリックが『非現世的』であり、このことが、カトリックを、プロテ
スタントよりも、この世の財貨に対して無関心に行っている。」という一般的
考え方ではなく、これとは逆に、「プロテスタンティズムこそ非現世的であ
り、このことが、プロテスタントの近代資本主義的営利生活への参加と、何
らかの内面的結びつきを有しているのではないか。」という問題を提示する
理由を理解することができるであろう。

ヴェーバーによれば、以上の例のすべてが、ただ一つのことを示している。
プロテスタンティズムによって喚起されたとされる「労働の精神 (der
Geist der Arbeit^①)」、 「進歩 (Fortschritt) の精神」などとよばれるものは、
今日一般に「現世の喜び (Weltfreude)」その他の「啓蒙主義的」意味に理
解されているのだけれども、それは誤りであることが、これである。

事実、ヴェーバーによれば、ルター、カルヴィン、ノックス (Knox)、フ
ェト (Voët) の古プロテスタンティズムは、今日「進歩」と呼ばれている
ものとはまったく無縁であった。今日では、最も厳格な宗派に属する人でさ
え、もはや無しですまそうとは思わないと思われる近代的生活のすべての面
に対して、古プロテスタンティズムは、真っ向から敵対していた。

そこで、そもそも古プロテスタンティズムの精神の特定の特徴と近代資本
主義文化との間に内面的親和性 (eine innere Verwandtschaft bestimmter
Ausprägungen des altprotestantischen Geistes und moderner kapitalistischer
Kultur) を見出そうとするのであれば、それは、古プロテスタンティズムが、

一般に考えられているように、多かれ少なかれ物質主義的な、またはさらに反禁欲的な、「現世の喜び」という特徴をもっていた、といったことではなく、むしろ、古プロテスタンティズムの精神の純粋に宗教的な特徴のうちに、求められざるをえないのである。

ヴェーバーによれば、モンテスキューは、『法の精神』の第20巻第7章で、イギリス人について、「三つの重要な事項について他のいかなる国民よりはるかに勝っている。すなわち信仰と商業（Handel）と自由である。」と述べているのであるが、イギリス人が営利の領域において優れていたことは、モンテスキューがイギリス人に対して認めた信仰の高最記録と関連しているのではないだろうか、と推測されうるのである。

ヴェーバーによれば、このように問題を設定すると、直ちに、いくつかのありうる関係が、曖昧ながら浮かび上がってくる。ここに浮かび上がってくるものは、あらゆる歴史的現象がそうであるように、扱み尽くすことのできない多様性をもつものである。しかし、ヴェーバーは、それにもかかわらず、ここに浮かび上がってくるものを、できる限り明確に定式化（formulieren）しようとする。そして、そのためには、かれによれば、以上において扱ってきたような漠然とした一般的観念の領域に留ることは許されえない。いまや、キリスト教のさまざまな特徴のうちに歴史的に与えられている偉大な宗教的思惟世界の際立った特徴と差異とに立ち入ることを避けることは、不可能なのである。

しかし、その前に、かれは、なお、二つのことについて述べておく必要があると考える。その一つは、かれが歴史的に解明しようとする対象の特質（Eigenart）についてであり、もう一つは、かれのこの研究の範囲においてそのような解明が可能であるのはどのような意味においてであるか、についてである。

われわれは、この二つが、次節において、とりわけその最初の部分で、述べられることになる、と考えることができる。